

西真寺 寺報

平成二十九年 冬号

3. 親鸞と如信

慈光照護のもと、ご門徒の皆様にはますますご健勝にて金仏相続に御績勲のことと、お喜び申し上げます。

先日厳修致しました報恩講には、一周忌に引き続きの御参詣を賜り、まことにありがとうございました。また、今回初めて寺の本堂を開設して、ヨガを開催した際には、ご門徒の皆様方をはじめ、近所の方々、また今迄お寺に縁のなかつた若い女性を含め、二十人の参加がありました。

ヨガは、呼吸法をもとに、心と体のバランスを整える古代インドから伝わる修行法です。ヨガで得られる境地は、「三昧」と言われ、禪定三昧と金仏三昧と同じ境地を指します。お釈迦様が菩提樹の下で三昧状態に入った際には様々な魔が現れ、誘惑されました。この魔とは「内なる他者」であり、煩惱を意味しています。親鸞聖人は、この「内なる他者」である煩惱と一生向き合い、これを抱えながらいかに生きるかを常に求めた求道者でした。

親鸞の例を挙げれば、親鸞は長子である善鸞を晩年に義絶していますが、善鸞の子であり親鸞の孫に当たる如信と親鸞との関係が「老人と子ども」の関係に該当します。如信は親鸞が六十歳以下二十年あまりの間かたわらに居り、「—すぢに聖人の教示を信仰する外に他事」とあるように密接な関係にあつたのです。

そして親鸞と善鸞に生じた親子間の葛藤に対し、その関係性における架け橋的な存在であつたに違いありません。親鸞はこの孫との関係性のなかで『教行信証』を執筆し、「内なる他者」と対峙することができたのです。晩年に親鸞と如信は互いに同居し京都に在住していましたが、実の子供である善鸞は鎌倉に居りました。

4. 小説『西の魔女が死んだ』に見るいのちの世界観

主人公のまいは不登校になり、祖母が一人で住む田舎の家に当分の間住むことに成りました。ある晩おばあちゃんと死について話す場面があります。まいがおばあちゃんに「死んだらどうなるの」と聞くと「死んだことは無いけど、おじいさんの死も経験しないかもせんが、同じ立脚地に立ち同じ方向に向くことはできるはずです。その手始めが、金仏です。お父さんに「死んだら最後何も無くなる」、まいが死んでも周りのみんなは、普段通りの毎日を過ごすと言われたそうです。おばあちゃんが「まいはずつとつらかったね」と言うとまいは、おばあちゃんにしがみつき声を上げて泣きます。おばあちゃんは「死んだあとは、ずっと体に縛られていた魂が、身体から解放され自由になつて長い旅を続けるのです」と答えます。しかし、まい

は、生きていてもこの身体がある限り、苦しむことばかりで、身體を持つ必要があるのかと聞くと、おばあちゃんは「体にしか経験できないことがあって、人間は成長するために生きていて、十分に生きる為に死ぬ練習をしているようなもの」と説きます。成長しなくてもいいと言い張るまいに対して、「春に芽が出て、光に向かって伸びるように魂は成長したがっているから仕方ないのです」と答えます。まいは納得したくないようでしたが、長年

苦しんできた重石が取り除かれ、明るく生きられるようになつていくのです。二人の関係には、一人で育むいのち観があります。

5. 老人と子どもが生む「いのちの教育」

河野博臣は、死に際して、それを言語化し整理することのできる人でも、無意識レベルでの個生化の過程（人間成就）という統合の実現を行うことが可能であり、それを援助できる人間関係によって、その人独自の死への準備への道を開けると述べています。死に往く老人は孫の世代との関係性の中で、人間性を取り戻していく過程を経験し、孫の世代と相互的にいのちを学ぶことができます。死のプロセスにおいて、「老人と子どもの統合」を通じて、人生最後に心の奥底にある「絆」を獲得していくのです。

人間は母なるものとの分離から最終的には統合という回帰が行われ、はかり知れない「いのち」へと遷ることで、安心を得ることができます。「死のプロセス」における老人と「出産のプロセス」を無意識に経験した子どもとは回帰現象において共鳴する関係にあると考えられます。

6. まとめ

老人と子どもの統合には、深い相互的関係を生む構造があり、老人に対し、その孫との斜めの関係を促すことが重要となります。「死にゆく老人」のかたわらに付き添う孫の世代の、経験的な姿勢や「感情の共鳴」が大悲となり、この悲歎を経て初めて「統合」を成就させるのです。

老人と子どもは、「いのちの教育」のやりとりをしながら、互いに根源的な迷いの世界から心の成長につなげていきます。この経験が生きる意味や知恵を創造するのです。そして、老人を見取ることができた子どもらは、この創造的な「生」により「死」を理解し、地域の「Aging in place」に対し「つながり合ういのちと未来」をもたらすことができるのではないか。この「いのちの世界観」こそが、阿弥陀仏の示す世界なのです。

日本の木スピスの第一人者である柏木哲夫は、臨終における死の教育の必要性を指摘し、「日常生活の中で死の体験を積んでおくことは、子どもが眞の意味で豊かな人生を歩み、将来、自分の病気、身内の死、そして最終的には自分自身の死をしつかりと受け入れる素地をつくることなのである」と述べています。

今、地域における「老人と子ども」の再統合に必要なことは、「いのちの世界観」を通じた関わり合いであり、この機会を、「コインテイネイトしていく人材が僧侶であるのです。臨終の体験を奪い、老人と子どもの絆を奪ってきた現代社会は、統合のための「素地」(place)を取り戻していく課題があるのであります。

「南無阿弥陀仏」とは、はかり知れない「いのち」と智慧の光をよりどころにして生きるというはたらきを指しているのです。